

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520633

研究課題名(和文) 韓国語および中国語を母語とする日本語学習者のカタカナ語の習得と意識に関する研究

研究課題名(英文) A study of acquisition of Katakana words by Chinese and Korean learners and their attitudes toward learning said words

研究代表者

山下 直子 (Yamashita, Naoko)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：30314892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：日本語学習者にとってカタカナ語(カタカナで表記される語)は学習が難しいものの一つであり、先行研究において教育の必要性が指摘されているが、実際には日本語教育の現場で十分な指導がされているとはいえない。そこで、本研究では効果的なカタカナ語学習をめざし、日本語学習者に表記と意味理解に焦点をあてた聞き取りテストと意識調査を行い、習得の困難点とカタカナ語に関する学習者の意識を探った。さらに、カタカナ語指導の試みも行い、指導に一定の効果があり意識づけが可能であることも示唆された。

研究成果の概要(英文)：Seeing the difficulty of L2 learners of Japanese in studying katakana words (i. e., those written in katakana, e. g., loanwords), it cannot be said that teachers give enough guidance concerning katakana words. Learners of Japanese as a second language need to understand katakana words on many occasions. More research should be carried out to accumulate data to develop methods and materials for teaching and learning katakana words more effectively. The purpose of this study is to analyze learners' difficulties in learning katakana words and their attitudes towards learning katakana words. We conducted katakana word listening tests focusing on notation and meaning and then conducted questionnaires to Korean and Chinese learners of Japanese on their attitudes toward learning katakana words. We also examined the effects of katakana word instruction. The results show that such instruction is effective and can improve learners' attitudes.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：日本語教育 第二言語習得 カタカナ語 外来語 語彙教育

1. 研究開始当初の背景

カタカナの氾濫が問題にされるようになって久しいが、日本語学習者にとってカタカナ語(外来語等のカタカナで表記される語)は学習が難しいものの一つである。石綿(2001)が指摘しているように、外来語は日本語化し変容する中で発音・文法・意味などいろいろな面で英語などの原語とずれが生じる。そのため、カタカナ語の習得には、さまざまな困難が予想される。また、堀切(2008)は、英語を母語とする日本語学習者の外来語受容態度は独自のものであり、聞き取りの困難が使用抵抗、さらには否定的な態度につながることを明らかにしている。カタカナ語の学習においては、成り立ちや習得上の問題に加え、カタカナ語への否定的な態度などの心理的要因の影響も大きいと考えられる。

しかし、多くの学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されていながら、漢字学習等に比べてカタカナ語に関連する研究は多いとはいえ、議論は萌芽的な段階にある。また、カタカナ語の教育・学習が必要であることは先行研究において指摘されているが、実際には日本語教育の現場で優先順位が高いとはいえ、十分な指導がされているとはいえない状況である。

カタカナ語の使用が今後も増加すると予想される中で、日本語学習者もカタカナ語を避けることはできず、効果的な学習を支援するための指導法や教材の開発は急務であるといえよう。カタカナ語も、漢字と同様に内容語として会話や文章中で重要な役割を占めており、語彙教育としてカタカナ語をとりあげる意義は大きい。カタカナ語について調査研究を行い、実証的な検証を積み重ねることが重要であると考えられる。

なお、カタカナで表記されるものは外来語が一般的であるが、和製外来語もあり非外来語がカタカナで表記されることも増えている。今後、それらを含めた指導が必要になると考えるため、本研究ではカタカナ語という語を用いる。

2. 研究の目的

本研究は、効果的なカタカナ語の指導や教材開発をめざし、カタカナ語習得の困難点とカタカナ語に対する学習者の意識を明らかにすることを目的とする。具体的には以下の3点を明らかにすることをめざす。

- (1) 日本語学習者にカタカナ語の聞き取りテストを行い、表記と意味の理解に焦点をあて、習得上の困難点を明らかにする。
- (2) カタカナ語に関する意識調査を行い、学習者がカタカナ語に対して持つ意識や態度はどのようなものか、それは習得にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

- (3) 上記の結果を元にして、指導の効果を検証し、効果的なカタカナ語指導の可能性を探る。

3. 研究の方法

調査対象者は、日本国内の大学や日本語学校で学ぶ外国人留学生等の日本語学習者と海外で日本語を学ぶ大学生である。主として韓国語および中国語を母語とする日本語学習者を調査対象者とし、比較のためタイ語母語話者も対象者に加えた。本研究では、当初は韓国語母語話者(以下、KLとする)と中国語母語話者(以下、CLとする)を調査対象者としてきたが、聞き取りテストの結果には母語の音韻体系や母語での外来語の影響がみられた。また、同じアジアの学習者ではあるが、タイ語母語話者(以下、TLとする)は、KLやCLとはカタカナに対する意識に違いがあることが先行研究で明らかになっている。そこで、学習者の母語による相違点と共通点をより明確にするため、TLを調査対象者に加え、同様の調査を行うことにした。

カタカナ語の学習にはさまざまな困難点が予想されるが、まず、本研究では「語形と意味」に焦点をあてる。聞き取りテストでカタカナ語を聞いて書かせ、その意味も母語あるいは英語で書かせて、表記と意味理解の結果を分析した。テストに使用した語は、これまでの調査結果をもとに精選したカタカナ語25語である。表記の誤用は、長音の挿入・欠落、濁音の挿入・欠落、ひらがなの混同などの分類基準と誤用の生じる位置(語頭・語中・語末)によって分類し分析した。

また、カタカナ語に関する意識調査は、カタカナ語の難しさ、これまでのカタカナ学習や要望などについて聞く質問紙調査を日本語とそれぞれの母語で作成した。質問紙調査の選択回答の項目は集計し、自由記述は母語によるものは母語話者に翻訳を依頼し分析を行った。

4. 研究成果

(1) 聞き取りにおける表記と意味理解

語彙知識に関して、Nation(2001)は「形」「意味」「使用」の3つの側面から分類し、「意味」の下位分類として「語形と意味」をおき、さらに受容知識と産出知識に分けている。第一段階として、カタカナ語学習のさまざまな困難点の中で、この「語形と意味」に焦点をあてた調査を行った。カタカナ語の聞き取りテストにおける表記と意味理解の結果を分析し、産出知識として正しい表記をできるか、また受容知識として意味を理解しているかを明らかにした。

山下・轟木ほか(2014)では、海外で日本語を学ぶ大学生147名(KL36名、CL61名、TL50名)の結果を比較し分析を行った。聞き取りテストの結果、表記に関しては全体の正答率71.2%、意味の理解に関しては正答率93.2%であった。KL・CL・TLともに、全体的

に意味の理解度は表記の正確さより正答率が高く、カタカナ語を聞いて意味は分かるが、正確に書くことは難しい。多くの語が音を聞いて意味を理解する受容的な知識のある受容語彙ではあっても、正しく表記することができる産出語彙としては定着していないといえよう。今回のテストで使用した 25 語の多くは、旧日本語能力試験の 3・4 級のものであり、調査対象者にとっては既習の語彙であると思われる。しかし、カタカナ語を聞いて意味は理解できるものの、必ずしも正しい表記が定着しているわけではなく、KL・CL・TL とともにカタカナ語の表記は難しいことが明らかになった。

母語別にみると、一人あたりの平均誤答数は表記と意味理解それぞれ KL 6.8・0.9、CL 5.2・2.1、TL 9.9・1.8 である(図 1 参照)。分散分析を行った結果、表記も意味ともに条件の効果は有意であった($F(2, 144)=18.71$, $F(2, 144)=4.92$, $p < .01$)。多重比較によれば、表記では KL と TL および CL と TL の間に、意味では KL と CL の間にのみ有意差があった($p < .01$)。したがって、表記では CL と KL は TL に比べて誤用が少なく、意味では KL は CL より誤用が少ないといえる。母語によって表記と意味理解ともに平均誤答数の結果に違いがみられた。

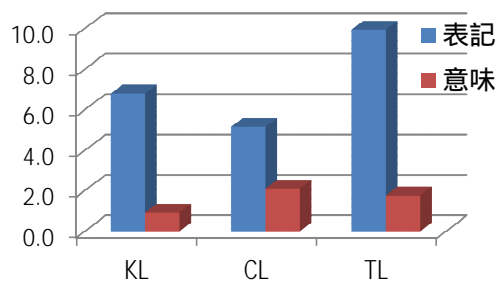


図 1. 母語別の表記と意味の平均誤用数

また、語別に聞き取りテストの結果をみると、表記・意味ともに誤答率の低い、あるいは高い語もあるが、多くの語で表記と意味理解の誤答率が異なり両者にずれがみられる。このずれは、語の抽象性やなじみの程度によって起こると思われる。表記・意味ともに誤答率の低い「コーヒー」(表記 8.8%・意味 0.0%)などは、学習者の身近にあってなじみがあり、具体的で視覚的に示しやすい語である。一方、表記・意味ともに誤答率の高い「ユニフォーム」(42.2%・16.3%)は一つの具体物で示しにくく、語に対するなじみがないものである。しかし、単に抽象的なものは習得しにくいともいえず、具体物で示すことが難しい抽象的な語であっても「インターネット」(23.8%・0.7%)などは誤答率が高くはない。授業だけでなく普段の生活で、文字や音声によって、どの程度触れる機会があるかということが影響するといえるのではないが。さらに、韓国語やタイ語では母語で

も原語である英語が「อินเทอร์เน็ต」と外来語として取り入れられており、その影響もあると思われる。以上のように、語によって表記と意味理解の誤答率にずれがあり、カタカナ語が難しいといっても、その「難しさ」には違いがみられる。結果として、全体的に難しい印象の増幅につながると考えられる。

さらに、山下・畑・轟木(2014)では、表記の誤答がどのような誤用であるのかを母語別に分類した結果、KL では、長音が欠落する、あるいは余分な長音が挿入するなどの長音の誤用が 53.1%と誤用全体の半数を占めた。CL では、長音 28.3%と濁音・半濁音 25.6%がいずれも多く、次いで促音 13.9%であった。TL では濁音・半濁音 33.6%、長音 22.2%と促音 16.5%で 7 割を占めた(図 2 参照)。表記について、長音などの特殊拍が難しい点は母語にかかわらず共通するが、誤用の傾向は異なり母語の音韻体系の影響や母語での外来語の影響もみられた。以上のように、KL・CL・TL には表記の難しさという共通点がある一方で、母語により難しさのポイントは異なることが明らかになった。

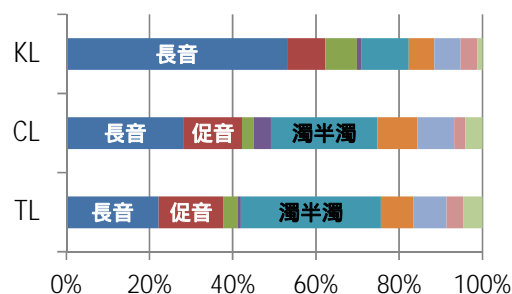


図 2. 母語別の誤用の分類結果

(2) カタカナ語に関する意識調査

意識調査の結果から学習者のカタカナ語に対する意識や態度を探った。意識調査の結果をみると、難しさに対する回答の傾向は母語別に異なり、TL は「カタカナ語は難しい」という問いに「思う」と答えたもの(「とてもそう思う」「そう思う」をあわせて)が 42.0%と四割を超えたが、CL は「難しいと思わない」が 44.3%と四割を超え、KL は回答が分かれた(図 3 参照)。カタカナ語は中国語と語彙的に距離があるため CL が最も困難さを感じるとする陣内(2008)などの先行研究とは異なる結果となった。これは、今回の調査は対象とした CL が平均 10 年を超える英語学習歴を持った大学生であるという背景に起因するのではないかと考えられる。

カタカナ語の使用に対する評価も母語によって結果が異なり、TL は KL と CL に比べて肯定的な回答であった。これは対象者が英語学習歴のある大学生であることと、TL が非漢字圏であることに影響を受けていると思われる。TL にとって既存の英語の知識から推測が可能なカタカナ語は、漢字熟語に比べればハードルが低いのではないだろうか。

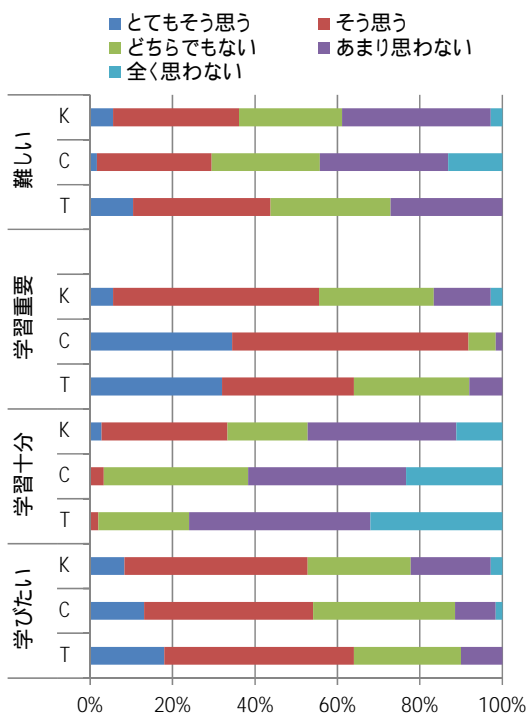


図3. 意識調査の主な結果

母語によって相違点がある一方で、カタカナの学習に関しては共通した結果がみられた。「日本語を学習するうえで、カタカナの学習は重要である」という学習の重要性はいずれも強く認識している (KL55.6%、CL91.8%、TL64.0%)。しかし、「これまでのカタカナ語の学習は十分である」と考えている回答者は少なく (KL33.3%、CL3.3%、TL2.0%)。その結果、「日本語の授業でカタカナ語を教えてほしい」という回答はKL52.8%、CL54.1%、TL64.0%と、どの母語話者も五割を超えている。母語によってカタカナ語の評価に差はあるが、いずれも学習への要望は強い。このような学習者の要望に応えるためにも、今後、具体的なカタカナ語の学習や指導を考える必要がある。

(3) 韓国語母語話者に対するカタカナ語の指導の試み

効果的なカタカナ語の指導方法を探るため、山下・畑・轟木 (2013) では、これまでの調査結果をもとに、指導の効果と指導が学習者の意識に及ぼす影響を検証した。カタカナ語の表記は難しく、既習であると考えられる語彙であっても正確な表記が定着しているとはいえない。その要因の一つとして、これまでカタカナ語の指導が十分には行われていなかったことが考えられる。そこで、語彙の「形式」である表記に焦点をあてた指導を行い、効果を検証した。

韓国で日本語を学ぶ大学生 47 名を調査対象者として、カタカナ語の聞き取りのプリテストとポストテストを行った。対象者を指導群・統制群の二群に分け、指導群には誤用が

生じると予想される長音や濁音などの表記を中心とした指導をし、また、カタカナ語学習の重要性を認識させた。指導によって学習者の意識は変化するのを探るため、指導群にはカタカナ語に関する意識調査も指導の前後に行った。

プリとポストテストの平均誤用数は、指導群で 23.1・8.4、統制群は 21.2・15.4 であり (図4参照) t 検定を行った結果、平均の差は有意であった (指導群 $t(29)=7.12$ 、統制群 $t(16)=3.46$ 、 $p < .05$)。ポストテストの群間の結果を比較するため t 検定を行った結果、平均の差は有意傾向であった ($t(23)=2.15$ 、 $.05 < p < .10$)。したがって、両群ともにポストテストで誤用数は減少したが、指導群は統制群よりも誤用が減少し成績が向上する傾向にあるといえる。指導に一定の効果が見られ、カタカナ語の指導が有効であることが検証された。

また、意識調査の結果から、指導後はカタカナ語の難しさが軽減し、カタカナ語に対する考えも深まっており、指導によってカタカナ語学習の意義やストラテジーの意識づけが可能であることが示唆された。

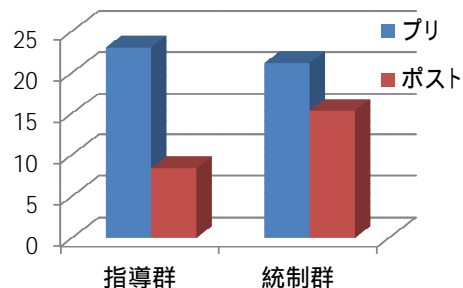


図4. 指導群と統制群の平均誤用数の変化

(4) まとめ

以上のように、カタカナ語の聞き取りテストと意識調査を行った結果、聞いて意味が理解できる受容語彙ではあっても正しく表記できる産出語彙としては定着していない語が多く、誤用の傾向には母語の影響がみられた。また、意識に関しても、学習者の母語による相違点と共通点があることが明らかになった。さらに、カタカナ語指導の試みも行い、指導に一定の効果や意識づけの可能性があることが示唆された。

カタカナ語の指導に多くの時間を費やすことは現実的ではないが、単なる暗記ではなく、効果的な学習や自主的な学びにつながるストラテジー探ることは重要である。今後、さらなる調査や検証を重ね、表記や意味理解以外のカタカナ語の困難点についても調査を行い、個々の学習者の母語や背景も考慮した効果的なカタカナ語の学習・指導を検討することを課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

山下直子、轟木靖子、畑ゆかり、スニーク・ニャンジャローン・スック、韓国語・タイ語・中国語母語話者に対するカタカナ語の聞き取りテストと意識調査、英語と英文学と 田村道美先生退職記念論文集、査読無、2014、pp.83-90

山下直子、畑ゆかり、轟木靖子、韓国語母語話者に対するカタカナ語の指導の試み - 聞き取りテストと意識調査より -、言語文化と日本語教育、査読有、45号、2013、pp.20-29

山下直子、畑ゆかり、轟木靖子、中国語母語話者を対象としたカタカナ語の聞き取りテストとカタカナに対する意識 - 語彙指導をめざして -、香川大学教育実践総合研究、査読有、26号、2013、pp.41-48

〔学会発表〕(計 6件)

山下直子、畑ゆかり、轟木靖子、カタカナ語の聞き取りテストと意識調査 - 韓国語・タイ語・中国語母語話者の場合 -、ICJLE2014 日本語教育国際研究大会、査読有、2014年7月10日~12日、シドニー工科大学・オーストラリア(発表確定)

山下直子、畑ゆかり、轟木靖子、カタカナ語の聞き取りテストにおける表記と意味理解 - タイ語母語話者の場合 -、第9回日本語教育学会研究集会、査読有、2013年11月30日、愛媛大学

畑ゆかり、山下直子、轟木靖子、韓国語・タイ語・中国語母語話者に対するカタカナ語の聞き取りと意識調査、2013年度日本語教育学会秋季大会、査読有、2013年10月13日、関西外国語大学

畑ゆかり、山下直子、轟木靖子、中国語母語話者に対するカタカナ語の聞き取りと意識調査 - 語彙指導をめざして -、ICJLE2012 日本語教育国際研究大会、査読有、2012年8月18日、名古屋大学

畑ゆかり、山下直子、轟木靖子、カタカナ語指導の試みとカタカナ語に関する意識調査 - 語彙指導をめざして -、第8回日本語教育学会研究集会、査読有、2011年11月19日、香川大学

山下直子、畑ゆかり、語彙指導を目指したカタカナ語の指導と意識調査、ICJLE2011 日本語教育国際研究大会、査読有、2011年8月21日、天津外国語大学・中国

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下直子 (NAOKO YAMASHITA)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：30314892

(2) 研究分担者

轟木靖子 (YASUKO TODOROKI)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：30271084

(3) 連携研究者

なし。

(4) 研究協力者

畑ゆかり (YUKARI HATA)

穴吹ビジネスカレッジ・主任